黒幻の騎士

志木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒幻の騎士

【Ｎコード】
Ｎ７１５９Ｚ

【作者名】
志木

【あらすじ】
世界は戦争、テロ事件が勃発。そのせいで５人の騎士が散ってしまった。
その騎士の一人の場所をつかみ、その一人”黒幻の騎士”と言う称号を持つ少年、ラキ。ラキを探すため一人の未熟者の騎士セラが探す。
ハチャメチャナようでグダグダのような物語。

プロローグ

「ん？…親父、これクレよ。」
「お嬢ちゃん、そんなに可愛いのに、男口調は駄目でしょうに？」
「はいはい、まぁ、ちょっと忙しいんでな！じゃあな！」ニコッ

タッ
ガチャッ
「セラ・ホールド。あなたに任務があります。」
「はい？なんでしょうか？」

「見つけたぜ！ネズミが！」

「君には、重大な任務だ。」
「はい！。」

って、何で俺になんだ？・・まぁ、いいか。

「それは、黒幻(こくげん)の騎士(きし)様を探して連れてきてほしい。」
「黒幻の騎士？…ってなんですか？」
「まぁ、会えばわかるよ」ニコッ
「…はぁ…。」
「頼んだよ。後、その人は男なんだけど、尾行かなんだか知らないんだけど
女の格好をしているから。」
「分かりました。」
「今は重大な自分の仕事をこなしているところだからね」
「了解しました。」

「気をつけてね」ニコッ
「はい。」

今や、この世界は、戦争。どこでも戦争やテロ事件が勃発してる。
そのせいで世界は汚れてしまっている。
そして、世界には5人の騎士が居た。
そして、その一人を現在一人の未熟者の騎士が迎えに行く途中だった。

ラキ
１６歳の少年。
生意気で強がりで素直じゃなくて結構鈍感？
５人の騎士の中でも最年少の騎士。
他人から”黒幻の騎士”と言われている。
なぜか、女装をしている。

セラ・ホールド
１９歳の男。
生意気だけど明るくて優しくて礼儀正しい。
ラキを探す重大な任務を与えられた。
未熟者の騎士。礼儀が正しく敬語。

1話　黒げんの騎士

タッタッ
一人の少女が林檎を食べながら歩いていた。
「…戦争か…。」ボソッ
「見つけたぞ！黒幻の騎士！！！」
「…追手か…まったく、少しは楽をさせてほしい物だな。」
シュッ
林檎を上に投げた。

ガタッゴトッ
「……。」
一人電車に乗る男。
『セラ・ホールド』現在、重大な任務中。

黒幻の騎士…どんな人なんだろう？…。

タッ
そして、電車を下りる。
「ここが…。」
辺りを見回す。
「…何も無い所ですか…。」
タッ
「！？…。」
「たく、時間の無駄なのが分からんのか。」
さっきの少女が駅の前に居た。
そして、セラは一瞬動きが止まる。
「もしかして、黒幻の騎士様ですか？」

「ん？そうだ、騎士団の奴等だな、お前。」
「あっはい！」
「俺を捕まえに来たか？」
少女は突然傘を出す。

こんな女の子が騎士！？…。

「えっと…これです。」
少女に手紙を渡す。
「ん？…。」
少女は手紙を開き、手紙を読む。
「俺は帰らないぞ。」
「えっ！しかし…。」
「なら、お前も来るか？」
「えっ？私もですか？」
「そうだ、そしたらいいのだろう？
監視が居ればいいだけの話だ。」
「分かりました。」
「俺はラキ。こんな格好をしているが、俺は男だ！！」
「あっ…はい。」
ラキとセラは汽車を待っていた。
「…あっ私はセラ・ホールドといいます。」
「そうか。俺の事はラキと普通に呼べ。」
「了解しました。では私の事も…。」
「分かっている。」
ラキは座り込む。

ガサッ

「居るぞ。」
「男も居るぞ。」
「構うな。撃つぞ。」
「撃て。」

ドクンッ！
「！？…。」
「ん？どうかしたのか？」
フワッ
「うわぁ！？おまっ！！！」
セラがラキをお姫様抱っこする。
バキューンッ！
「！？…追手！！」
追手の男が突然撃って来る。
「おい！下ろせ！セラ！」
「守ります。」
「はぁ！？」
スッ
バンッバンッバンッ！
「！？…。」

早い！なんだこいつは…。

セラは追手の手に一発で銃を狙い撃った。
タッ
「お前…。」
ハッ！
「！？…だ、大丈夫ですか？！」
「あっ…大丈夫だ…。」
「それは、良かったです。」

「…これから、よろしくな！」ニコッ
「！？…あっはい、こちらこそ」ニコッ

こうして、彼等は出会った。

2話　林檎の騎士

「ラキ！汽車に乗りますよ！！」
「あっ！ちょっと待て！親父、林檎を…１０個くれ。」
「はいよ。」
「ん、ありがと！つりはいらない！じゃあ！」
そして、汽車が発車する。
「…たく。」
そして、ラキは飛んで汽車の入り口に着地。

「ふぅ～…林檎も無事だな。」
カタッ！
そして、ドアを開けて急いでセラが来た。
「ん？おう、大丈夫だ。」
そして、汽車の中に入る。
そして、座席に座る。

シャリッ
ラキが林檎を食べる。
「……。」
「ラキは林檎がすきなんですか？」
「…嫌いだ。」
「えっ？…じゃあなぜ？」
「…分からない…知らないうちに勝手に食べてる。」
「そうですか。」
ガタッ！
「ラキ？」
突然窓を開ける。
「綺麗…。」

「えっ？」
二人の目の前には大自然が広がっている海が見えていた。

「綺麗！…俺は海が好きだ！」
「そうですね。」ニコッ

そして、数時間が経つ。
目的地まではまだ遠いらしい。

「Ｚｚｚｚ。」
ラキは寝ていた。
「……。」

こうしてみたら、本当に女の子みたいだな。

「……ごめ…ん…なさい…。」
「えっ？…。」
ラキがセラの手をつかむ。
「…ごめん…なさい……。」
ポロッ
ラキの目から一粒の涙が零れ落ちる。
「……。」
優しくセラがラキの頭を撫でる。
「やっぱり…まだ子供ですね。」ボソッ

キーンッ！！！
突然汽車が止まる。
「何が起こってるんですか？」
パチッ
「ん？…なんだ？。」
ラキが起きる。
「分かりません。突然止まりました。」
「…チッ…やつらか。」
「追手ですか。」
そして、林檎が落ちた。
「あっ…俺の林檎！！…。」
ラキが林檎を拾おうとする。
グシャッ！
「！？…。」
「あぁ～…悪い。足がつい滑っちまった。」
一人の銃を持った男が林檎を踏み潰した。
「……。」
ラキは立ち上がる。
「見つけたぞ。黒幻の騎士のラ…ギィィ！！！」
バンッ！！
「！？…ラキ？」
「何お前食べ物粗末にしてんだよ！！俺の林檎を返せ！！」
ラキは男の足を銃で撃つ。
「！？…俺が初めて貰った…。」
バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！！
「ラキ！！」
「！？…。」
パシッ！
「もう死んでます。」
「…あぁ…。」

カタッ
ラキは自分の銃を落とす。
男はもう死んでいた。
何発も撃たれて血が大量に出ていた。
「…ハァ…ハァ…ハァ…。」
「大丈夫ですか？」
ガラッ！
「見つけたぞ！！」
「……。」
バンッ！
「邪魔です。」
「！？…。」
セラが入ってきた男の足を即撃った。
グイッ！
「うわぁ！！。」
「行きますよ。」
「！？…おぉ。」
セラがラキの手をつかんで走って逃げる。

「…ってどうやって逃げるんだ？」
「これです。」
汽車の中に発明中の乗り物があった。
「運転できるのか？」
「出来ますよ。とそれと。」
パシッ
「！？…。」
林檎を渡された。
「あげます。」
「……ぁ…りがとう…。」
「行きますよ。」

そして、乗り物は動いて二人はどこかの町に向かった。

3話　逃亡の騎士

ブーッ
汽車から逃げ出して2時間は経った。

「……。」
「何所を見ても砂漠だな。」
「そうですね。」
シャリッ
「…セラ。」
「はい？」
「運転代わってやる。」
「えっ？でも…。」
「休め。」
「分かりました。」
ラキは運転するが…。

「…これはなんだ？」
「えっ？…。」
そして、車が物凄いスピードで走り出す。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
「はははははは！面白いぞ！！」
運転が派手すぎて、セラは顔色が悪くなる。
だがその逆にラキはとても嬉しそうで楽しそうだった。

「…うぅ…。」
「大丈夫か？」
「平気です。」

「だが、本当に砂漠だな。」
「そうですね。」
クンックンッ
「ラキ？」
ラキが鼻で何かを嗅ぐ。
「臭う。」
「えっ？」
ドドドドドドドドッ！！！
砂漠から大きな生き物が出てくる。
「うわぁ！」
「おぉ～…巨大だな。」
「驚いてる場合ですか！！行きますよ！！」
「俺に任せとけっての！！」
「えっ？…。」
ラキの手から大きな剣が出てくる。
「！？…。」
「…。」ニッ
そして、剣を持ち大きな生き物を真っ二つにする。
バターンッ！
そして、生き物は倒れる。
「行くぞ。」
「はい！！」
そして再び車が動く。

「……。」

『ラキ…。』

「！？…」
「ラキ？」

ハッ
「…あぁ…嫌。」
時計の針が動く――――。
「不思議だな。」
「何がですか？」
「…嫌、なんでもない。この砂漠い近い村はもうすぐだ。」
「了解です。」
人間が捨てた時間までもが動く――――。
これが永遠という事――――。
潰れてもまた直せる――――。
それが、永遠。

4話　2つの称号の騎士

「ついたぞ。」
「はい…って。」
「ここが村。」
「これが村ですか…。」
二人の目の前には、もう滅んでしまっている村だった。
全て廃墟かし建物も全てボロボロだった。

「行くぞ。」
「あっはい。」
そして、二人は黙々と村の中で歩いていく。

ガシャッ
「…はぁ、まったく仕事が多いと困るな。」
「……。」
「俺に、バレと命はないと思えばいい。」
そして、ラキは草葉に銃を向ける。

「!?…。駄目です!ラキ!」
「はぁ!?。」
バンッ!!
「うわぁ!」
そしてラキは驚いて銃で撃ってしまうが、セラが銃を下に向けた。

「痛ッ!…。」
「ラキ!大丈夫ですか?…。」
バンッ!
「!?…。」

「ラキ！」
ラキが誰かに肩を撃たれる。
「グッ！…誰だ！」
「ここは騎士団が入ってきていい場所じゃねぇー！！」
「出て行け！！」
「…ハァ…ハァ…。」
ラキの肩から血は流れて行った。
「…はは…ははははははは！！」
「！？…。」
ラキが突然笑い出す。
「そうか、なら撃って見ろ。」
「！？…。」
「ラキ！」
「どうした？撃てないのか？そんな度胸も無いくせに！
そんな事言ってるほうがバカ…。」
バンッ！
そして、男の一人がラキの腹を撃った。
「グッ！…ゲホッ！」
ラキは血を吐く。
「ラキ！…。」
「…へぇ、撃てるか…あぁ、セラ心配すんな。
俺は…平気だ。」
そして、ラキの傷がどんどん治って行った。
「！？…。」
「黒幻の称号を持った者は普通の人間ではない。」
「！？…。」
「俺は黒幻の騎士！不死身の称号を持つ者だ！」
「！？…。」
「だけどしっかし、やってくれるよなぁ～。」

ラキは自分の服を見る。
「この服、結構高かったのによ。」
ラキの服は自分の血で血まみれ。

「後、お前ら。俺等別にお前らを連行とかしねぇーから。
ちょっとこの村に用事だけ。次撃ったら、殺す」ニコッ
ラキは微笑んで言う。
村の人は顔を引きずっていた。

「この村は、エルフドという小さな村なんですよ。」
「小さい村だけど、こんなに古代の歴史が書かれている壁画がある。
ここはもう騎士の奴等は居ないのか？」
「この村はもう用済みといわれ、かえってきました。」
「そうか、なら俺が言ってやろう、村を大切にしない奴等は死ぬんですよってな。」
「ラキ、脅しはやめてください。」
「はいはい。」
ラキとセラと村人が向かったのはある大きな建物だった。

「ここは？」
「ここは、古代から眠っている。何をしても起きない、最古の魔術師（ヴァンパイア）が
眠っておられます。」
「ヴァンパイア…。」
「どうかしたんですか？」
「いや、少し懐かしいと感じただけだ。」
そして、セラとラキは建物に入る。

「最古の魔術師ねぇ～…本当に居ると思うか？」
「思いますけど。」

「お前は真面目だな。」
「そうですか？」
「うん。まぁ、いっか。」
そして、黙々とその場所に着く。

そして、一つの棺桶が合った。
「…いかにも眠っていそうだな。開けてみるか。」
「えっ！！！危険ですよ！！」
「怖いのか？」
「えっと…それは…。」
「まぁ、いいだろう。」
「はぁ…。」
そして、ラキが棺桶を開ける。

そして、中から少女が出てきた。

バタン
「…最古の魔術師ねぇ、これってさ、キスしないと起きないような気がするぞ。」
「！？…キス！！！！」

5話　度胸の騎士

「って、キスって誰がするんですか？」
「俺がする。セラは下がっていろ。」
「えっ！？ラキ？…。」
「最古の魔術師はキスをした者に恋をする。」
「えっ？…。」
「セラはそう言うの嫌いだろう？」
「はい…。」
「ふん。俺に任せておけばいい。」
「！？…ですが…。」
「俺は、誰にも頼んだりしない。」
ラキは思いつめた顔をする。
「…？。」
「まぁ、いい。」
そして、倒れている少女を台に寝かす。
「はぁ…。」
「どうかしたんですか？」
「…いや、別に…。」
ラキは少女にキスをする。

そして少女の目が少しずつ開ける。
「……。」
「ん？…人？…。」
「ようやく目覚めたか。最古の魔術師。」
ドキッ！
なぜかラキを見て頬を赤くする。
「なんだ？」
「あっ！…名前…。」

「俺はラキ。」
「私は、セラ・ホールドです。」
「…私は最古の魔術師。名前は…ライア。」
「なら、ライア。」
「？…。」
「俺と一緒に来い。」
「！？…。」
「俺にはお前の力が必要だ。」
「えっ！？…。」

『お前の力が必要だ。必要。必要。』

カァァァァァァァァ
「！？…。」
ライアは顔を真っ赤にさせて耳までも真っ赤にさせる。
「どうするんだ？」
「…く…。」
「あぁ？」
「行きます！！行かないと逃げれないもん！！」
「そうか。セラ、行くぞ。」
「はい。」
そして、ヴァンパイアを見方につけた。

「……はぅわぁ～…。」
ライアは顔を真っ赤にしてるのに自覚があり自分の顔を触る。
「どうかしましたか？」
「あっ…ううん。なんでもない。」

「そうですか。」
「あなたはどうして、ラ…キと一緒にいるの？」
「依頼です。」
「依頼？…。」
「そうです。ラキを騎士団に連れて帰る重要な任務なんですけど…。
いつしかこうなっていました。」
「…そうなんだ。」
「Ｚｚｚｚ。」
三人は村を出て、車で次の町に向かっていた。
そして、ラキは眠っていた。

ツンッツンッ
ラキの頬をライアがつつく。
「…私はラキが好き。」
「えっ！？」
「それが私の意志だと思う。」
「…そうですか…。」
セラはあきれていた。

「私も寝る。」
「分かりました。」
「あなたは…優しい人…だと思う。」ボソッ
「えっ？…。」
ライアはラキの隣で眠った。

「……。」

幼い子供みたい…本当に。

「見つけた。黒幻の騎士。」ニッ

6話　狙われし騎士

「Ｚｚｚｚ。」
何時間経っても村には着かず。
ラキだけは唯一寝ていた。
相当疲れている様子だった。

「…ねてる。」
そして再びラキの頬をつつくライア。
「あまり寝てないのでしょうね。」
「そうかもしれない。」
「まだつきませんね。」
「…まだ遠いよ。」
「えっ？」
ライアが魔術を使って遠くの距離まで見えていた。
「…後３日くらいはかかるかもしれない。」
「！？…そんなにですか…。」
「うん。だけど。ご飯とか無くても大丈夫なの？」
「食料はあるのですが…。」ニコッ
「そうか。」
ライアとセラは結構気が合う中？。

「撃て。」

「…。」
ドンッ！
「うわぁ！？」
バーンッ！！

突然ラキの足がセラの背中に当たりハンドルを放してしまうがすぐに態勢をなおす。
そして、その運転のおかげで銃に当たらなかった。
「って…何ですか！？」
「…敵襲。」
「チッ…セラはそのまま運転。ライアは敵を倒せ。」
「了解です！」
「うん！」
そして、ライアは４個くらいの術式を出す。
「…吹き飛べ！！」
４個の術式が同時に発動する。
そして銃を持っている奴を吹き飛ばす。
「セラ。」
「はい？」
「運転変われ！！」
「はぁ！？…。」
「行くぞ！！」
「！？…。」
セラの横から割り込み運転し始める。
相変わらず、派手な運転をする。
「俺は何で狙われるんだろうな…。」
「……。」
「追手が追いかけてくる！！」
「えっ！」
「俺のこの派手な運転でもか！！しゃーないな。」
「ラキ？」
「運転頼んだ。」
「えっ？…。」

ドクンッ！
「！？…。」
ラキの様子がおかしかった。
「なぁ、次の町で合流しような！」ニコッ
「えっ！ラキ！」
「ライア。」
「ん？」
「セラを守ってくれよ。」
「うん。」
ラキが優しくライアの頭を撫でる。
そしてラキは…。

「じゃあ、3日だ。3日で合流時点に着け！分かったか？」
「うん！ラキ、待ってるよ。」
「セラは？…。」
「…待っています。だから生きてくださいよ！！」
「当たり前な事を…。」ニコッ
そして、ラキは剣を出し追手の車に乗り移る。
「！？…。」
「ラキ…。」

その時のラキは…”化け物”にしか見えなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7159z/

黒幻の騎士

2011年12月29日13時55分発行